

第 2 回新潟市文化創造推進委員会 会議録

開催日時	平成 28 年 7 月 25 日（月）午後 3 時～午後 5 時
開催場所	新潟市役所本館 6 階 第 3 委員会室
出席者	<p>【委員】（50 音順） 伊藤聡子委員、今井美穂委員、太下義之委員、大谷剛史委員、角地智史委員、 迫一成委員、田中久美子委員、丹治嘉彦委員、能登剛史委員、村山和恵委員 出席 10 名 欠席 1 名（石田美紀委員）</p> <p>【オブザーバー】 新潟県文化振興課長補佐</p> <p>【事務局】 文化スポーツ部長、文化政策課長、文化創造推進課長、文化政策課長補佐、 文化創造推進課長補佐</p>
傍聴者	1 名
報道機関	0 社
会議内容	<p>1 開 会 （司 会） 第 2 回新潟市文化創造推進委員会を開催します。</p> <p>委員の皆様におかれましてはお忙しい中お集まりいただきまして誠にありがとうございます。司会を務めさせていただきます文化政策課の南雲でございます。よろしくお願いいたします。</p> <p>本日、机上に資料を置かせていただきました。先にお送りしておりました、次第と資料 4、資料 5 を机上のものと差し替えさせていただきますので、よろしくお願いいたします。また、もう一つ机上配付させていただいております「No is m O『愛と精霊の家』埼玉公演」という表書きのチラシでございますが、裏面に「Be Se T o 演劇祭新潟」のお知らせが載っておりますので、お持ち帰りいただければと思います。よろしくお願いいたします。</p> <p>まず、お知らせでございますが、本委員会は公開の会議とさせていただきます。会議録作成のために録音させていただきますので、ご了承ください。また、ご発言に際しましては、マイクをご利用いただき、ボタンを押していただきますとマイクのところの赤い輪が光りますので、ランプがついたことを確認していただいたうえでご発言をお願いいたします。ご発言が終わられましたら、恐れ入りますがまたボタンを押して赤いランプが消えるようお願いいたします。</p> <p>本日は、石田美紀委員がご欠席ですので、ご報告いたします。また、第 1 回会議をご欠席されました丹治委員から簡単に自己紹介をお願いしたいと思います。丹治委員、よろしくお願いいたします。</p>

(丹治委員)

先回、所用で欠席になりました。今日からこの会に参加させていただきたいと思います。

文化・スポーツ全般にわたって、これから市民とともに皆さんと手を携えて、次の時代に、全国のどこにでもないような、新潟にしかないというような仕掛けが作ればと思いながら参加させていただきたいと思います。よろしくをお願いします。

(司 会)

ありがとうございます。

それでは、ここからの進行につきましては太下委員長にお願いしたいと思います。太下委員長、よろしくをお願いします。

2 意見交換

(1) 平成28年7月文化庁発表 文化プログラムの実施に向けた文化庁の取組みについて (報告) (資料1)

(太下委員長)

それでは、進行を務めさせていただきたいと思います。最初に、「(1) 平成28年7月文化庁発表 文化プログラムの実施に向けた文化庁の取組みについて」、事務局から説明をお願いいたします。

(事務局)

文化創造推進課課長補佐の丸山と申します。よろしくをお願いいたします。私から、「(1) 平成28年7月文化庁発表 文化プログラムの実施に向けた文化庁の取組みについて」、資料1に基づき説明させていただきたいと思います。

こちらは7月の頭に文化庁から示された資料ですが、6月6日の第1回推進委員会での説明と重なる部分が多い資料となりますので、前回は文化庁の文化プログラムを中心に説明させていただきましたが、今回は新しく示された情報を中心に説明させていただきます。

資料の2ページをご覧くださいと思います。下の四角、「文化プログラム認定の仕組み」と次のページの上の四角、「文化プログラム認定に係るスケジュール等」の二つを併せてご覧くださいと思います。まず、資料2ページの下四角、青い文字で「1. 公式文化オリンピック」があります。東京オリンピック組織委員会では「文化プログラム」という言葉は使わずに、「文化オリンピック」という言葉を使用しています。基本的に両者は同じもの、つまり、オリンピックに向けた文化事業を指しています。

その文化プログラムは大きく三つに分かれています。まず、一つ目が、「1. 公式文化オリンピック」ですが、こちらは組織委員会、国、開催都市、公式スポンサーが実施するものです。右側に「London 2012 Cultural Olympiad」のロゴマークがありますが、東京オリンピックでもこれに相当するロゴマー

クが作成されます。次に、「2. 関連文化オリンピックアード」です。こちらは地方公共団体、非営利団体などが実施するものです。これも右側にロンドン五輪のときの「Inspire program」のロゴマークがありますが、これに相当するロゴマークも作成される予定です。そして、この1番、2番については東京オリンピック組織委員会が管轄する文化プログラムとなります。最後、「3. beyond2020 プログラム」は、内閣官房オリパラ事務局や関係省庁、東京都が管轄するものです。公式スポンサー以外の企業等が実施する事業も対象となります。こちらのロゴマークも作成される見込みです。今後、新潟市といたしましては、2番の「関連文化オリンピックアード」と3番の「beyond2020 プログラム」の認定を目指していくこととなります。また、前回説明いたしました文化庁の文化プログラムは、「文化オリンピックアード」と「beyond2020 プログラム」の枠組みの下で実施する形となります。

次に、3ページ下の四角、「文化庁の取組について」と4ページ上の四角、「文化芸術立国実現に向けた文化プログラムの推進について」を併せてご覧いただきたいと思います。4ページに前回説明いたしました文化庁の文化プログラムの三角形がございますけれども、2段目と3段目が主に新潟市が取組む文化プログラムとなります。2段目が地方公共団体、民間等が主導する取組を文化庁が補助するプロジェクト、3段目が民間、地方公共団体等が主体的に取り組むプロジェクトとあるものです。そして、この2段目の一部が「関連文化オリンピックアード」に認定される可能性がある文化プログラムになります。その関係を示したものが3ページの下の方の四角の図になります。下の部分に、先ほど色分けしておりました文化プログラムが示されておりますが、その中から主催者が組織委員会に文化オリンピックアードの申請をして認定されるという図式になっております。ただ、先日、東京オリンピック組織委員会への聞き取りをいたしまして、「関連文化オリンピックアード」は厳しい条件が示される予定との内容をお聞きしたところです。「関連文化オリンピックアード」は、チラシやポスターなどの広報媒体において非公式スポンサーの企業名を記載することが制限されるというお聞きしました。つまり、協賛いただいたり後援を行った企業名、実行委員会の組織構成員である企業名が掲載できない可能性が高いということでした。聞き取りのとおりとなれば、申請できる事業がかなり限られてくることとなります。「公式文化オリンピックアード」と「関連文化オリンピックアード」は、本日、認定基準などが発表される予定ですが、その内容を確認いたしまして対応していきたいと思っております。また、「beyond2020 プログラム」の枠組みについてはまだ示されておきませんが、これについては企業名掲載などの制限がないと思われまますので、積極的に申請していきたいと思っております。

(太下委員長)

ご説明、ありがとうございました。今の資料説明について、ご質問がありましたらお願いします。

2番目の関連文化オリンピックというのはいくらも広がらない可能性があるということですが、一方で、1番の「公式文化オリンピック」は組織委員会、国、開催都市、公式スポンサー、JOC、JPCが主催しなければいけないので、もともと対象が広がらないわけです。結果として、実際は、1番の「公式文化オリンピック」の、これはそれほど広がらないわけですがけれども、組織委員会、国、開催都市、公式スポンサー、JOC、JPCが主催しなければいけないので、20万件の大半が「beyond2020 プログラム」カテゴリーになるのだらうということですね。

では、続いて、「(2) 新潟版アーツカウンシル職員募集状況等について」、ご説明をお願いします。

(2) 新潟版アーツカウンシル職員募集状況等について (報告) (資料2) (事務局)

引き続きまして、「(2) 新潟版アーツカウンシル職員募集状況等について (報告)」ということで、説明させていただきたいと思っております。資料2をご覧ください。7月4日に設立のための補正予算について、議会の採択を経まして、7月5日から公募を開始いたしました。プログラムディレクター1名、プログラムオフィサー2名、臨時職員1名を募集しております。プログラムディレクターは8月4日が募集締切になっております。プログラムオフィサー、臨時職員は8月10日が締め切りとなっております。広報先ですが、こちらは資料に記載がございませんが、新潟市や芸術文化振興財団のホームページ、ハローワークのほか、文化芸術関係の求人情報などを発信するホームページに掲載しております。

次に、応募資格ですが、詳細は2枚目以降の募集要項に記載しております。主なものですが、原則として新潟市内に居住が可能な者、また、プログラムディレクター、プログラムオフィサーについては芸術文化活動に関する業務経験を有する者などを上げております。また、応募要件ではありませんが、広報もアーツカウンシルの重要な業務と考えておりますので、プログラムオフィサー応募者については、提出書類の実務経歴書、こちらは資料の後ろから3枚目についておりますが、こちらに広報業務経験を記載していただくことになっております。今後行われる選考のスケジュールについては、資料の2ページ目に詳細がございます。7番、スケジュールと記載しております。プログラムディレクターについては、8月12日に二次選考があり、8月15日に決定を通知いたします。プログラムオフィサーと臨時職員は9月2日に二次選考があり、9月5日に決定を通知いたします。そして、10月の文化プログラムスタートに間に合うよう、9月26日にはアーツカウンシル新潟を設立する予定です。なお、選考委員には、本委員会の太下委員長に選考委員長をお願いしているほか、石田委員、丹治委員、能登委員に選考委員をお願いしております。現在の申し込み状況ですが、プログラムオフィサーに2名お

申し込みをいただいております。また、問い合わせを含め、申し込みの見込みがありそうな方はプログラムディレクター、プログラムオフィサー、臨時職員ともに数名いるものと認識している状況です。

(太下委員長)

ご説明、ありがとうございました。

新潟版アーツカウンシルの職員募集状況について、何かご質問等ございますでしょうか。

お知り合いの方がいましたら、ぜひ宣伝してください。

続いて、「(3) 新潟市文化創造都市ビジョンの見直しについて」、資料3と4を続けて事務局からご説明をお願いいたします。

(3) 新潟市文化創造都市ビジョンの見直しについて

(資料3、資料4、資料5、資料6、参考資料)

(事務局)

私から資料3、それから資料4を続けてご説明させていただきたいと思っております。恐れ入りますが、資料3と4、参考資料としてお配りしております、現在のビジョンの施策体系も併せてご覧いただきたいと思っております。本日は、主に新しいビジョンの骨子となる施策体系及び成果目標、指標についてご意見をいただきたいと思っております。

まず、資料3をご説明いたします。こちらは、前回、委員の皆様からいただいたご意見とその対応案について整理したものです。主なものについてご説明いたします。いただきましたご意見1番、2番として、新しいビジョン策定の目的についてご意見をいただきました。現在のビジョンでは、理念として、「文化芸術が有する創造性を活かしてまちづくりを進め、市民がいきいきと暮らし、将来にわたってまちが活性化する新潟市をめざします」と定めておりますが、この理念を継続しつつ、本市が目指す姿をより具体的に表現するため、理念と三つの基本方針の間に「新潟市の目指す文化創造都市の姿」を新たに記載することを提案いたします。その素案が資料3の右側、対応(案)のところに点線で囲んだ四つの姿でございます。

続きまして、ご意見の3番、「世界規模での発信」については、「基本方針2 新潟文化の個性と多様性の伸長～『新潟市らしさ』を深め、国内外へ発信」として、世界に向けた発信を強く意識した内容とします。委員の皆様からは、世界に向けて発信するべく、本市の顔となる具体的なコンテンツについて、さらにご意見をいただければと存じます。

ご意見の4番、5番、6番の新潟市らしさについては、同じく基本方針2の中で気候・風土を「水と土の文化」、また新しいものを取り入れる、あるいはいろいろなものを融合できる力を「みなとまち文化」として強調して整理していきたいと思っております。

続きまして、ご意見の8番、「市民側から見るビジョン」というご意見もい

ただいております、これにつきましては、現在、文化活動を行っている市民の皆様のうちどなたか代表になっていただくような方やこの推進委員会の委員の皆様のうちどなたかを想定したいと思っておりますが、そういった方にコラムを書いていただきまして、それらをビジョンに掲載することを検討したいと思っております。

続きまして、ご意見の 11、12 番ですが、「交流定住人口の拡大」についてでございます。「定住人口の拡大」は文化芸術を通じて子どもや若者への取組みを進めることが有用と考えております。「交流人口の拡大」と両輪で取組むものと整理いたします。

ご意見の 16 番でございます。こちらは「広域的な連携」についてご意見いただきました。これにつきましては、「基本方針 3 文化を活かした創造都市の実現」に盛り込んでいきます。

18 番、食文化での取組みにつきましても、基本方針 3、食文化の発信として関連する施策について盛り込みます。

ご意見の 21 番、22 番、成果目標、指標については後ほど資料 5 でご説明いたします。

資料 4 は「(仮称)新潟市文化創造交流都市ビジョン施策体系(案)」としております。こちらも参考資料としてお配りしております現ビジョンの施策体系と併せてご覧ください。資料 4 は合計 4 枚にわたっております。基本方針 1 は 1 ページ目、基本方針 2 は 2 ページ目から 3 ページ目、基本方針 3 が 4 ページ目となっております。現ビジョンの三つの基本方針それぞれの下にある 1、2、3 という大項目に対応するものが新しいビジョンの 1 列目、色のついている四角囲みの部分です。現ビジョンの(1)、(2)、(3)という中項目に対応するものが、新ビジョンの 2 列目となります。本日、主にご意見をいただきたい骨子というのは、この 1 列目、2 列目の太線で囲んでいる部分となります。3 列目に当たる部分が各施策を進める際の主な方向性です。ビジョン本冊では文章化することを想定しております。続く「施策例及び検討する取組例」は、この大項目、中項目を検討する際にイメージしやすいよう、今回は参考として例示させていただいたものです。庁内調査で把握したものを中心に記載しております。今後、所管課へのヒアリングなどで精査してまいります。

資料 4 でございますが、赤字表記箇所が改定箇所となりますが、主な点を中心にご説明いたします。まず、ビジョンの名称につきまして、「文化創造交流都市」としまして、「交流」を加えました。本市の個性ある文化の魅力を発信し、人、物などさまざまな交流が盛んに行われ、まちの活性化が図られるという姿をめざし、新たに「交流」という視点を加えるものです。

まず、基本方針 1 についてです。1 列目の三つの大項目については、大きな組み換えは行わず、新たな視点を加えていきます。大項目一つ目の「文化芸術の振興」では、中項目に当たる「(2)あらゆる人々が参画できる」とい

う表現としまして、「情報デザインを取り入れた発信」、「障がい者の芸術活動支援」、「高齢社会における文化芸術の活用」という方向性を加えました。中項目「(3) 子どもや若者の『創造力』の育成」では、これまでの子どもという視点に加えて若い世代への育成支援を明確にしました。

続いて、大項目の二つ目、文化施設につきましては、現ビジョンでは施設のあり方、役割中心の記載だったものを、「魅力向上と活性化」へと更新し、各施設のボランティアやファンクラブなど、市民参加の視点と、施設間での広域連携の視点を加えました。

大項目三つ目の「関係機関との連携強化」は、これまで、大学など学術研究機関との連携を一項目設定しておりましたが、そこを「市民団体、NPO法人、大学、民間企業、報道機関などの民間主体の文化芸術活動との協働、連携を推進」とし、また、市芸術文化振興財団との連携にはアーツカウンシル設立を見据えた機能強化を加えております。

基本方針2についてです。こちらでは、現ビジョンの基本方針にあります『新潟市らしさ』を深め、広げる」というサブタイトルの「広げる」を世界に向けた発信を強く意識し、「国内外へ発信」としました。大項目での大きな変更点は、一つ目を「個性ある歴史・文化の活用」として、「みなとまち文化」を最初に打ち出し、開港150年の歴史・文化と、「新しいものを積極的に取り入れる“みなとまち気質”による新しい文化の取り組みを推進」としていく方向性で整理いたしました。

また、大項目の二つ目として、「水と土の文化創造」に、現ビジョンでは歴史と併記している自然の要素を組み込み、2番目に位置づけました。また、現ビジョンでは一番下の6番目に「地域の文化発信」として、8区における地域文化の振興とまちづくりをまとめておりましたが、各区での取り組みも各方向性に併せて新潟市の取り組みとして整理する体系とし、代わる大項目の六つ目として、資料4の基本方針2枚目の最後になりますが、「新潟文化の発信」として「戦略的な広報・プロモーションの強化」と「海外公演や海外展などへの参加・出展」を方向性に加え、国内外への発信強化を打ち出しています。基本方針2について、大きく変わったところは以上になります。

基本方針3についてです。こちらの大項目での大きな変更点が、現ビジョンでは四つ目に「文化創造都市の推進」として、先進都市などとの連携を主なものとしていたものを、新しいビジョンの体系としましては、4番目に「文化を核とした広域連携」を定めまして、さまざまな主体や内容での交流、ネットワークの推進に方向づけました。

(太下委員長)

ご説明、ありがとうございました。参考資料でお示しいただいたのが現行のビジョンで、この柱を生かして、これに新たな視点、項目を差し込んでいくと。それは前回の第1回の会議で確かめていただいた、この4枚にわたる「施策体系(案)」という構造になっているわけです。ご意見としては、大き

く二つのレベルが出てくると思いますがけれども、大きな構成、柱立てが、これから5年間でこれに不足がないのかということと、具体的内容として抜けないのか、どこにそれが収まるかという視点があるかと思えます。ぜひ、ご意見をいただければと思います。

最初に私から、これは今、ダブリがないように分かりやすいように整理していただいていますけれども、最終的にビジョンになるときには再掲も含めて書いていただければいいかなと。具体で言うと、例えば、基本方針1の大項目1の(2)の中に、障がい者、高齢者とありますが、同じような項目が基本方針3の大項目1の(1)に出ていますよね。これは出てきても問題ないと思うのです。例えば、新潟市の予算でも必ず再掲する項目が出てきますよね。そういうものと同じようにダブってもいいので、後々はそういった部分も掲載していただければと思います。

ご説明を聞いてご意見はないでしょうか。この辺りはこうしたほうがいいのかとか、ありましたら、ぜひ、ご意見いただきたいと思えます。

(田中委員)

今、私たちがやろうとしているのは、「文化オリンピック」に向けて主催者が申請するためのもの、つまり、新潟市文化創造交流都市ビジョンが申請する中身、これで戦うということなのではないでしょうか。

(太下委員長)

それだけではないと思えますけれども。

(事務局)

この文化創造都市ビジョンそのものが申請する内容になるということではないです。あくまで、「文化オリンピック」に申請するのは何らかのイベントとして企画したものという形になると思えますので、これはあくまでも市全体にわたるビジョンということなので、市の文化政策全体を取りまとめるビジョンということです。ここでは、「文化オリンピック」のことはとりあえず置いておいていただければと思います。

(太下委員長)

「文化オリンピック」に実際に申請されるのは、新潟市が主催される文化プログラムです。あとは民間でやっている文化プログラムが「beyond2020プログラム」に入っていくと思うのですが、これらはあくまで個別具体のプログラムなので、今、議論しようとしているのは、ビジョンということで、新潟市の文化振興をどういう方向性で考えていくべきなのかという、もっと上位概念になるわけです。

(田中委員)

これを基礎にしてそのイベントが立ち上がっていくという意味ではないのですか。

(太下委員長)

そういうこともあるでしょうけれども、直接に関連するものではないとい

うことです。

(田中委員)

私ばかり分かっていないのかもしれませんが、今まで送られてきた資料を見せていただいて、オリンピックの2020年に向けてのものというよりは、追加項目などを見ますと、オリンピックをきっかけにして文化活動を向上させるという意味なのだなど、ここに来るまでとらえてきたのですけれども、今、一生懸命説明していただいた新潟市文化創造交流都市ビジョンはそのためのものではないですか。

(太下委員長)

そのためだけではないです。オリンピックはあくまでも手段です。

(田中委員)

申請するものは、いつやるものを申請するのですか。

(太下委員長)

期間は、多分これから明示されるでしょうけれども、恐らく今年の秋から2020年の夏までの期間になると思います。そこに具体的な文化プログラムを申請して、何らかのロゴをつけていいよということでしょう。

(田中委員)

それを出すための基礎をやっていると理解していいですか。

(太下委員長)

基礎とご理解いただいてもいいのですけれども、それだけではないということです。あくまでもオリンピックのためにわざわざこのビジョンを作っているわけではないので。オリンピックはあくまでも手段です。

(田中委員)

きっかけとして、認定をしていただくとやはりいいことがあるから一生懸命、皆さん申請するのではないのでしょうか。

(太下委員長)

あるかどうかは分かりませんが。

(田中委員)

予算がつくとか。

(太下委員長)

そういうケースもあるでしょうね。

(迫委員)

私もいろいろありすぎてよく分からなかったというか、頭の中にあまり入ってこなかったのです。何でも感があつてぴんと来ないなというのが正直なところではあるのですけれども、具体的に、この部分について、今、悩んでいたりするとかについて話しましょうとなったほうが話しやすいというか、全体的にどうですかとなると、ちょっとぴんと来ないなという感じというのが感想です。あと、「交流」という言葉が入ってきて、分かるのですけれども、改めてこのビジョンの理念の言葉を見ていると、新潟らしい言葉が入

っているわけでもないというか、世の中にある普通の言葉がたくさん並んでいたりするのです。例えば、基本方針2の中だと「みなとまち」と入ったり、「水と土の暮らし文化」とか入ってくると特有の感じがするのですけれども、この上の文章がどこの市でもできそうな文章だったりするので、ここに少し何か味があってもいいのかなというのを、今さらですけれども、思いました。

(田中委員)

まだ資料5についてはご説明がなかったので、それに触れるのもどうかと思うのですけれども、この成果目標・成果指標を見るとよく分かると思うのですが、どこかに集中するというよりは、より多くの市民が文化活動を楽しんでいるということであれば、絞らないで裾野を広くして、親しむ市民の割合を上げるのだなど。これを読むとそのようにとれるのです。

(太下委員長)

多分、行政としてはここだけに絞るということは言えないと思いますので。

皆さんはいろいろな分野でご活躍されているわけですから、ご自身の分野で見てその項目がきちんと記述されているのかという観点でご意見をいただければと思います。私自身に対してもそうですけれども、全部について総合的なご意見をくださいとは諮問されていないような気がします。

(事務局)

まず、最初に戻りまして、今日、最初「文化プログラムの実施に向けた文化庁の取組み」という報告があったので、恐らくオリンピックアードの部分メインのように分かりづらかったのかもしれないです。今日のスタートの説明が悪かったのかなと思っています。あくまでも今回、改めてなのですけれども、今回の推進委員会の目的については、ビジョンの策定ということが一番かと思っています。

これまでの文化創造都市ビジョンについては、平成24年から平成28年の5年間のビジョン、文化に関する新潟市の計画ということで、本当に私も思うのですけれども、文化という幅が広くて、迫委員が言われるとおり、いろいろな取組み、本当に幅広なので、どうしても総論的なものになってくると思います。本当は集中と選択というのが一番効果が出やすいのかもしれないのですけれども、やはりビジョンというすべてを網羅しながらもれなくというのが私どもの考え方です。平成28年度までの現文化創造都市ビジョンでしたので、今回、まずお願いするのは、今年度中に策定しますので、平成29年度から5年間、平成33年度まで。これは西暦に直しますと2021年度になります。オリンピックは2020年ですから、2021年度までのビジョンになりますので、beyond というのでしょうか、オリンピックを乗り越えて、その後も含めてどうしていくのかという5年間の計画なのだという考え方で、広くといいますか、皆様それぞれの分野がありますので、そういう観点でご意見をいただければと思います。

また、この中で、このビジョンの方向性にしがった形で、恐らく、文化

プログラムというのでしょうか、オリンピックアードの、では何をするという個々のプログラムが決まってくるのかなと、そのように整理をして考えているところです。すみません、個人的な理解も含めて補足説明させていただきました。

(太下委員長)

ご理解いただけましたでしょうか。要するに、あくまでもビジョンの策定であるということですね。

(伊藤委員)

どこにそれを書くのかというのはまだ分からないのですが、新潟の独自性を出すということはもちろん大事なのですが、3ページのアニメも新潟にとって非常に有力なコンテンツだし、すごい賞を日本アニメ・マンガ専門学校の人たちがもらっていたりするので、これは非常に売り出していきたいところです。ただ、世界の中で、例えば、外国人観光客をこれで呼ぼうとかと思ったときに、新潟出身の人のアニメがまだ世界的にそれほど売れていないというか。例えば、鳥取の「コナン空港」を見るためだけに中国人の人たちがそこに行ったりということがあるわけなのです。境港はゲゲゲの鬼太郎だし、そういうことで、まず、連携するというのも一つ視点としては大事なのかなと。

鳥取とか、ほかのアニメの部分と連携をして回ってもらって、新潟にも来てもらうという仕掛けを作る。それプラス海外にも新潟の作品が出てもらうような仕組みというのももちろん大事だと思うのですが、そういう意味で、アニメだけではなくて、いろいろなところで、みなとまちというくくりだとすると、ほかのところとも連携しながらまた新潟にも来てもらう。新潟単体だけでその文化で発信をしていくとなると、かなりハードルの高い部分があったりするので、そういう連携の項目というか、そういう部分も一つあったらいいのかなと思います。

(太下委員長)

ありがとうございました。

事務局からもお答えいただきますけれども、まず、基本方針3、4ページ目の大項目4の文化を核とした広域連携の辺りを充実させたものにしていけば、今の伊藤委員のご意見を反映できるのではないかと思います。

(事務局)

今、太下委員長がおっしゃったとおり、大項目4というのは、新たに私たちも設定した項目ですので、ここは内容をもう少し充実させて、他都市との連携という部分はきちんと充実していきたいと思います。

(太下委員長)

今の伊藤委員のご意見に関連して質問なのですが、全国の空港の名前が、今、どんどん変わっているではないですか。「コナン空港」もそうだし、例えば、庄内空港は「おいしい庄内空港」。新潟空港は何かあるのですか。

(事務局)

そういう名前を変えている空港というのは、実は県営の空港だったりして、意外と県がやろうと思うとすぐできたりするのですけれども、新潟空港は国管理の空港なものですから、そういった部分でも、実はやりづらいという部分があります。あと、鳥取みたいにコナンとかゲゲゲの鬼太郎とか、代表作がこれだというのが決まっているとやりやすいのですけれども、これが新潟の弱点でもあるのですが、あまりにも有名な漫画家が多いために、どれか一つに絞って打ち出すというのがなかなか難しいということが、正直、あります。

(丹治委員)

今の点で、連携というキーワードから、新潟市は新潟県とやっていますよね。であるならば、県との連携、あるいは国との連携、中野課長から、なかなかそこは線引きがとあるのですが、それを超えないと、アクセスであったりいろいろな問題がクリアできないのかなと思うのです。例えば、朱鷺メッセに万代島美術館という施設があるし、新潟市内には新津美術館、新潟市美術館、クオリティの高い美術館、文化施設がたくさんある中で、ここは市だから、ここは県だからというバリアを張るのではなく、そこはオール新潟という視点の中でつながっていかないと、文化というのは線引きがあって生きていけませんとか、あるいは遮断機が下りたからという暗黙の了解で考えられるとやはりつまらなくなるので、その辺は臨機応変に。あるいは、フットワーク軽くつながっていけばいいのかなという気がしてなりません。

(太下委員長)

本日、オブザーバーで県の文化振興課からもお越しいただいているのですが、いかがでしょうか。

(オブザーバー)

新潟市の場合、もともと文化の面で力を入れているところで、どうしても県の場合、割とそうではないところがけっこう多いので、新潟市の部分は新潟市に、どちらかというとお任せでいいのかなと、今のところ思っています。やはり、なかなかそういう機会がないところとか、そういったところを県は中心にやっていかなければいけないのかなとは思っています。明確にここはこうだというようにはしたくはないのですけれども、今の感じだとそういうところなのかなと考えているところです。

(太下委員長)

県内で考えても、例えば、食で考えたら村上市と新潟市の食の魅力とを結びつけていくところで、新潟県、新潟市、村上市という連携は、多分、ありえますよね。現代美術も、大地の芸術祭をやっていますし、今、現美新幹線も通っているので、次回の大地の芸術祭のときにもっと連携が図れて、いろいろな可能性が今後出てくるかなと、個人的には思っています。

施策体系の2ページ目、基本方針2です。ここで、大項目の1番目に「個

性ある歴史・文化の活用」という点で、中身としては、歴史的なもの、それから合併市であることを踏まえた地域の独自性ということが書かれています。大項目3で「地域文化の継承と発展」、有形無形の文化財について書かれているのですけれども、多分、中身的に近い感じがして来てしまうのかなという気がします。どちらでもかまわないのですけれども、より言葉を違う形で使い分けていくのか、または大項目の考えとか編集とかの時点でご検討いただくのかどちらかがよろしいのではないかと思います。施策の柱自体についてはそれほど違和感がなかったのですけれども。

(事務局)

太下委員長の意見、参考にさせていただきます。今聞いた感じでは、我々としてはどちらかという一つにするのではなくて、3番目の大項目の言葉なりを、1番目もそうですけれども、少し言葉を考えて、区別する方向で考えていきたいと思います。

(伊藤委員)

今の2ページのところなのですけれども、新しく付け加えた“みなとまち気質”というものがあるのですけれども、新しいものを受け入れるということと、それから今、伝統文化として新潟にずっと培ってきているものを、新しい気質で、新しい魅力を付け加えて最先端のものに発信していくというか、そういう視点もとても大事なのではないかと。例えば、三条の玉川堂のように古い伝統文化なのだけれどもものすごい最先端の美しさというか魅力を出しているという、そこが成功の秘訣なのだろうと思うのですけれども、そういうものを、例えば、新潟の食だとか文化だとか踊りだとか柳都だとかそういうものにも何か付け加えることによって世界にない新しいものになる可能性もあるのかなと。そういう意味では、別々ではなくて、融合というか、ひと味付け加えるというか、そういう視点が何か文章にあるといいのではないかと思います。

(太下委員長)

今後、練り上げていく中で、そういった観点も、ぜひ、踏まえていただければと思います。

(迫委員)

今話を聞いていて思ったのですけれども、3枚目の6番、「新潟文化の発信」というところで、発信となるとどちらかという出ていこうというような感覚が強いと思うのです。世界大会ではないのですけれども、世界の質が高い方々を呼び入れて、新潟で国際大会というか。それで、そのコンテンツを新潟独自のものでやると、こちらから外に行かなくても外の高いものが中に入ってきて、みなとまち文化、みなとまち気質というところで受け入れるというところと重なり合っても面白いのかなと。世界と混ざり合うというのを新潟で行う。プロジェクションマッピングの国際大会がまた今年も新潟であって、面白いし、見てみたいと思うと同時に、世界のすごいレベルのものを

新潟で体感できれば、新潟市の人たちのレベルも上がって行って、感度が本当に上がっていくのかな感じたので、そういうものが入ってくると現実的というか、面白そうかなと思いました。

(太下委員長)

みなとまちらしい感じがしますね。ありがとうございました。

(角地委員)

先ほどの伊藤委員の、少し似ている点かもしれないのですが、伊藤委員が言われたように、これまであった既存の魅力に一つアクセントをつけ加えて魅力を一段引き出していくという方向もあると思うのですが、市民にとっても当たり前になっているような風景や日常をもう一度見つめ直すことで魅力のある要素が残っているかなと思っていて、例えば、新潟のまちづくりとかで新潟のまち歩きをして、自分たちのまちをもう一回見直して、当たり前になっていた風景をもう一度文化として取り戻すという視点があるかなと思うのです。このビジョンには、魅力としてみんなが認めているものをさらに強化していく方向なのかなと思うのですが、魅力自体を市民と一緒にもう一度見つめ直すというようなビジョンがあってもいいのかなと思いました。

(太下委員長)

文化資源の再認識、再発見みたいな話ですよ。先ほど見ていたときにそのような事業をやっているような記載がありますよね。

(事務局)

今のものと、基本方針2、2ページの一番上の「開港 150 周年と“みなとまち”新潟」の辺りで、施策例の中に、例えば、中央区えんでこ（まち歩き）事業とか入っていますけれども、この辺りでそういったものを含んでいるイメージではおりました。

(太下委員長)

表現とか、もう少し強調するとか、何か表現の工夫はあるかもしれません。

では、私からも。4ページ目で「文化を核とした広域連携」とあるのですが、これも、今日も補足がありましたけれども、新潟市のアーツカウンシルということですが、これは、先ほどご説明はなかったかもしれませんが、文化庁が推進している事業の一環でもあるわけです。全国で文化芸術を支援する、専門的な人材を雇用してそういう組織を立ち上げていく。その第1回目の自治体に全国の中から新潟市が選ばれたと、こういうことが背景にもあるわけです。各都市とも方向性を模索しているところなわけです。そういった意味でいうと、全国の自治体アーツカウンシルの連携を、むしろ新潟市が主導するような形でやっていかれてもいいのではないかと、私は思っています。いろいろなやり方があるでしょうけれども、例えば、創造都市ネットワーク日本にアーツカウンシル部会みたいなものを作ったらいいのかなとも考えています。

実は、先日、佐々木雅幸先生にその話をしたら、いいねということでもあったので、タイミングとしていつ作るかになりますけれども、今年度中がいいのかどうか。来年度にまた多分、今年以上の自治体が新たに加わることになります。そうすると、10都市以上になりますから、そのくらいから始めるのがいいかもしれません。いずれにしても、新潟市が幹事をやられている間にそういうものを作られたらいいのではないかと思います。そして、アーツカウンシルの交流のために、全国から新潟に来てもらえばいいのです。

資料5と6があるのですけれども、先ほど少し資料5の話題が出ましたけれども、こちらをご説明いただいてから、委員の皆さんに全体的なご意見をいただきたいと思います。

(事務局)

事務局からのお願いというか、先ほど説明の中で申し上げたのですけれども、資料3に戻っていただいて、3番、世界規模で発信できるような施策、方向、ビジョンを持っておくことは重要というところの対応案の中に書いてありますけれども、具体的なコンテンツについて、もし何か意見があればいただきたいということと、その次もそうなのですけれども、新潟らしさとして掲載する内容について、これは入れたほうがいいのではないかとというのが、もし、今思いつくものがあれば、少しご意見いただければと思います。

(太下委員長)

より具体的なオーダーが出ました。世界規模での発信、交流のための具体的なコンテンツと新潟らしさですね。先ほど少し文化資源の話が出ましたけれども、これは具体のアイデアみたいなものがあればということですね。こんなことをやったらいいのではないかとか、こういったところに着目したらいいのではないかと、いうことについて何かございましたら、ぜひ、お願いいたします。

(事務局)

能登委員のところはアート・ミックス・ジャパンで世界的な取組みをされていますよね。

(能登委員)

そうですね。文化政策課の刺激を受けまして。

(太下委員長)

何かご意見はないですか。

(能登委員)

何かということでは全然ないのですけれども、昨年度、文化政策課が日本で先陣を切って、多分、太下委員長など、文化プログラムのシンポジウムを昨年の6月か7月に開催されたときに、ちょうどたまたまパネラーで私は参加させていただいて、いよいよオリンピックが2020年に決定ということで、いかに日本がこれからの日本の文化、自分たちの国の文化コンテンツなどを海外からたくさんの人たちを呼ぶために活用していこうかという本腰の話を

昨年度聞いたのです。そこから私たちアート・ミックス・ジャパン自体の、さまざまな伝統芸能を集めるイベントですが、このコンテンツを日本から世界に発信できるようにということで、今年の12月に海外開催が決定しました。来月辺りにまたプレスリリースなどをするのですけれども、そういう動きが、新潟が先んじて行われているということ自体も、今日見せていただいた、これはよく文化政策課がいろいろと書いて、私たちでもなかなか理解できないような難題を、いろいろな方々が言うことを全部広く取りまとめているというところでとても感心した次第です。

実際、成果としても出始めてきている、市民の皆様にもなにやら新潟の日々の生活が、ゴールデンウィークになるといろいろなイベントがあつて、新潟空港に降りると前よりも少し明るくなったとか、夏場になると少し人出も中心市街地に出てきたり、それだけではなくて、8区すべてに行き渡っているような施策が出始めてきているということは非常にめでたいことで、なおかつ投資をこれからも続けていく必要があるなという実感に変わっているものだなと思います。

同時に、これからしなければいけないものというのは、やはり、今あるさまざまなコンテンツ、たくさんありますけれども、先ほどもちらっとお話が出ていたかと思うのですが、情報としての発信です。3番、3ページのところででしょうか。それをいよいよ、過去5年間分の、こうなつてこういう感じで、今、こうなつていきます。そしてこれからこうしていくのですということイメージないし戦略的な効果と、強力にタグを組みながら、新潟市の文化は打ち出していくことが非常に重要なポイントになってくるのではないかと考えています。文化プログラム、オリンピックを見据えて新潟市が先頭を切っていた、または東アジア文化都市が奈良市、京都市よりも早いというのが、これは新潟人がまずは自慢したほうがいいのに自慢できていないというか、そういった観点を、文化創造交流都市ビジョンでいかに価値があるのかということ伝えていくことが重要なのではないかと感じています。

(太下委員長)

能登委員のプロデュースされているアート・ミックス・ジャパンは素晴らしいと思うのですけれども、期待を込めて申し上げますと、市の施策になるかどうか分からないですけれども、あのプラットフォームが今は国内だけのものになっていますけれども、アジアの伝統芸能とかそういったものの大きなショーケースというかフェスティバルになっていくと、まさに世界発信という大きなチャンネルになるのではないかと思いますので、ぜひ、頑張ってくださいと思います。

(今井委員)

「新潟文化の発信」のところなのですけれども、ジャンルが違つかもしれないですけれども、やはり、ここに出てくるのがとてもアーティスティックな部分とか伝統文化の部分とか、インバウンドとか、けっこう、私よりもつ

と若い人たちの世代となかなかリンクしないものが多いなと思っています。先ほどの話にもあったとおり、「新潟文化の発信」、もともと既存のものに乗っかって新潟がうまく発信できる形がいいのかなと思います。

一昨年くらいから、東京ガールズコレクションを新潟で開催したいと動いています。発端が、東京ガールズコレクションの実行委員に新潟市出身の方がいらっしゃいます。まだ北陸というか日本海側では一度も開催したことがなくて、ぜひ、本部としても新潟でやりたいと。去年は福島でやったので、新潟でやれば、やはりその近県の人からも何か新潟に来てもらえるきっかけになるのではないかと。私もいろいろ動いていて、そのときに言われたのが、今はやはりインバウンドとかそちらのほうにしか予算を出したくないではないですけれども、そういう方向性で言われてしまったのです。そう言われたときに、今、若者の世代は新潟のアパレルとか、私も新潟でタレント活動をして6年目ですけれども、いまいち新潟でタレント業をやっているとかそういうきっかけになるようなイベントごとがまだまだ少なかったり。その中で、この前のNGT48ではないですけれども、既存のあるものが新潟に来るといっただけであれだけ全国のメディアが取り上げてくれるという機会があったので、まだ東京ガールズコレクションの開催はあきらめていないのですけれども、何かもう少し今の若者たちの世代にリンクしたイベントとか文化を取り入れながら、それをきっかけにこういうほうに導いていくような、分かりやすいインパクトのあるものもこういうビジョンの中に入れることで、若者世代がわくわくすると思うのです。私も東京ガールズコレクションが新潟に来るかもといったときに、ほかの県に自慢になるなど。富山にはないし、山形には行かないものが新潟で開催だぞといったときに、今まで新潟のアパレルが落ちぶれていたなと思っていたのが、これで変わる起爆剤になるかもみたいな温度が若者に広がったら、けっこう面白いことになるのではないかと考えていたので、もう少し何かそういうテイストで文化の発信なども考えていただければ、私たち世代はうれしいかなと思った意見でした。

(太下委員長)

ありがとうございます。例えば、アイドル文化とかですね。

(今井委員)

そうですね。ご当地アイドルというのは増えてきたのですけれども、やはりまだまだ、東京ガールズコレクションも10年を超えて、まだ文化として残っていて、あれだけ有名なモデルたちが100人以上も集まって、代々木体育館だと3万人ですけれども、それが新潟だと少し規模は小さくなるけれども、今までそういう事例がなかったのです。私も新潟発のカワイイ博というファッションショーに出させてもらいましたが、あれは新潟で作ったものだったので、全国にある知名度ではなかったもので、失敗ではないけれどもけっこう小規模なものになってしまったのが、東京ガールズコレクション in 新

潟とつくだけでも全国のものが分かるイベントだとなるので、とても広告効果はあると思います。私はアイドルとは違うのですけれども、それを持ってくる中で、新潟のご当地アイドルが出るきっかけにもなりますし、新潟のニットだの着物だの、最近、私も作っているのですけれども、かわいい農作業着とかそういうものをさりげなく大枠に組み込んでいくことで、新潟はこういうこともやっているのだとかという分かりやすい土台があると、とても広めやすいのかなという考えです。

(太下委員長)

ありがとうございます。どこに入るのかは分かりませんが、若い人の文化という視点も入ってくるといいですね。

(伊藤委員)

今の関連なのですけれども、確かに今井委員の言っていることもなるほどと思ったのは、私は新潟から県外に出て行くと、新潟というと、まず、やはり新潟美人、かわいいというのは一つの文化でもあるのかなという気はするのです。美少女図鑑でしたか、あれも新潟発ですよ。せつかくそういうイメージが新潟にあるのであれば、やはりそれを生かさない手はないのかなという気がして、それが東京ガールズコレクションなのかカワイイ博なのかはあれですけれども、やはりそれだけで来ていただけるというコンテンツには何かなりそうな予感します。

(太下委員長)

いいですね。

(能登委員)

質問なのですけれども、今のようなお二人のお話の場合、文化・スポーツコミッションというのが新潟市にあると思うのですけれども、そういうもので誘致活動はやっていないのですか。

(事務局)

十分に対象にはなりません。多分、まだ東京ガールズコレクションについては具体的にコミッションのほうで動いているということはないような気がしますので、今井委員のほうでそういう動きがあるのであれば、コミッションとしても協力するように話はしたいと思います。

(今井委員)

ありがとうございます。予算の組み方を、ぜひ市からも考えていただければありがたいという感じでございます。

(能登委員)

予算が難しいですね。行政の予算をあてにした文化政策というのは、行政予算が切れたときに継続しなくなるというか、民間でいかにそれを継続していくかということが。私は15年にいがた総おどりをやっていますけれども、そこがないと、新しいイベントをいかに立ち上げ、誘致したとしても、花火の打ち上げで終わってしまうというか、景気が悪くなると花火の数が少なく

なってお客さんも集まらなくなるというように思います。

今、一番人を集めようと思えば、ポケモンGOでしょう。新潟市役所に何か現れるみたいな。そのために何千万円だか市がやったらいいと思うのですけれども、来年にはそのムーブメントは終わっていると思うのです。

論点としては、本当に今ある継続されているようなもの、または継続しはじめているもの、これから継続するであろう部分に対して、行政がいかに関後方支援ができて、なおかつ市民の皆様にも分かりやすく伝えていくことができるのかということに集中したほうがいいかなと。東京ガールズコレクションはいいと思います。

(今井委員)

県とか行政がお金を、県も応援していますという絵を描いてくれることで、新潟の企業もたくさんいるので、ちょこちょこお金が集まれば問題ないと思うのです。何かそういう応援してくれる姿勢を新潟から発信していくようになるといいなと思っております。すみません、少しこれと外れた意見なのですけれども、よろしく願いいたします。

(丹治委員)

交流人口の視点からすると、この前、NGT48が来たときはすごいなと思ったのですけれども、ただ、1点、あるパッケージの移植というのはいかなものかと少し思ったりもするのです。先ほどお話のあった新潟の衣装であったり新潟の文化がそこに入ると、とても付加価値が出ると思います。そこはとても気をつけたほうがいいと思います。視聴率が高い、あるいはこれもやると人が来るという構図の下に、やはり新潟独自のものをそこに織り込んだり、少し引くかもしれないけれども、先ほどのお金の話と同じように、継続して持続可能なものになるべき視点というものを忘れずに作り込んでいかないと、パッケージの移植、あるいは、ある冠を持ってくればそれで視聴率がとれるかという問題、逆行するので、その辺は注意したほうがいいかなと思ったりします。

(今井委員)

ありがとうございます。福島とか北九州でも開催されるのですけれども、福島は地震の被害と、北九州は暴力系のイメージを払拭したいということで県が乗り気だったのですけれども、新潟はそれがなくても変に潤ってしまっている地域なので、言っていることはとても分かるなと思ったので、自分でいろいろと水面下で動いてみようかなと思っていますが、一応、情報共有ということで、よろしく願いします。

(田中委員)

1回こっきりの、アイドルのための来県でも、実際に来たことによって、新潟って近かったんだねという声は、イメージだと雪のところでは遠いのではないかと思う人が大半で、来てみたら近いんだねと思わせたことはとても大きくて、実際にお昼を食べたりすると、お米がおいしいと聞いていたけれど

も本当においしかったねと。1回こっきりでも次につながる。その催しはつながらないけれども、何かの呼び水になったことは確かなので、何という項目にしたらいいか分かりませんが、効果はありますよね。けっこう大きいと思います。

(迫委員)

今のお話を聞いて思ったのが、フランチャイズっぽくというか、大きいものをただ新潟でやるという形ではなくて、コラボというか、対等な立場と一緒に、「in 新潟」というよりも、新潟のカワイイ博と東京ガールズコレクションと一緒にやるみたいなことになると、新潟のそれはすごいねとか、呼べたんだというような感じがするとか。どうせお金を出して呼んだんでしょとならないような、コラボという対等な関係のイベントのやり方というのがあるといいのかなと思いました。

先ほどの、世界規模で発信できる具体的なコンテンツについてのご意見というのは、具体的な国だったりエリアだったり、これに対してはこのエリア、これに関してはこのエリアということを確認にしていくと、何かやっていけそうだったり、それに詳しい人が、私はどこのこれに詳しいので何かしようかという方が出てきたりして、何か実現可能になったりするのかなということも思ったりしました。

(太下委員長)

重点エリアというのは必要かもしれないですね。

(角地委員)

今の迫委員の世界規模での発信というところで、新潟市はナント市との姉妹都市の関係というのが一つあると思っています。ナント市は文化政策でまちづくりを行って世界的に評価されている場所だと思います。そういうメソッドというのはしっかりあると聞いています。そこの交流事業というのも、新潟市で毎年やっていると思います。

私は障がいとアートの専門員として現状をお伝えしますと、来年の秋に、日本からアール・ブリュット展を行うという動きがありまして、ナント市で日本の障がいがある人たちの作品を一堂に集めた展覧会と、障がいのある人もその展覧会を期に多くの方がナント市に渡って交流をするという事業があるのですが、そこに、ぜひ、姉妹都市の新潟市としても関わられるような、コラボという話もありましたが、協力して何か関わられるようなことができるといいのかなと思っています。

今、新潟県の障がいアートについて言いますと、なかなか作品が見出されていないという状況です。滋賀が一番盛んなのですが、滋賀の調査員と一緒に新潟県内を回ったときがありまして、そのときの感想は、やはり、回られていないだけで、施設では日本的に見てレベルの決して低くない作品が作られているという現状もあるので、ぜひ、そういう、今あるものをもう一度見直したり、発掘したりすることで出てくるものがあるという印象を持ってお

ります。

(太下委員長)

ナント市で来年開催されるというのは、ナント市側が主催する事業ですか。

(角地委員)

日本側が主催になっていて、事務局が手をつなぐ育成会と、その交流事業のために実行委員会形式を取っていて、全国の障がい施設が委員として加わっているという形ですが、そういう動きです。

(太下委員長)

角地委員がおっしゃるように、ナント市と新潟市は特別な関係なので、行ってくるのは当然として、向こうからも何か新潟にお越しいただくようなプログラムも企画して、双方向でできるといいですよ。ほかに何かございませんでしょうか。

では、資料5、6に進みます。

(事務局)

続きまして、資料5のご説明をさせていただきたいと思います。こちらでは、新ビジョンの成果目標及び指標として、五つの案を挙げさせていただきました。成果目標1は、「より多くの市民が文化活動を楽しんでいる」としまして、指標としましては、「日頃、文化活動に参加している市民の割合」を、今年実施する市民アンケート調査により把握します。この市民アンケート調査を資料6として添付しております。これは今週中には発送するものでございます。また後で改めてご覧いただきたいと思います。成果目標2としまして、「市民が新潟市の『文化・芸術』に対する取り組みの推進を実感している」としまして、指標は、新潟市が毎年実施している市政世論調査の結果から、「新潟市としてよくなっているものとしてか『文化・芸術』を挙げる市民の意識」を把握します。続いて、成果目標3、「子どもたちが新潟市の魅力を知り、愛着を育むための機会がつけられている」とし、指標を「新潟の良さを伝え、愛着を育む活動をした学校の割合」としてあります。成果目標4は「文化創造交流都市としての魅力により新潟市を訪れる外国人が増加している」として、指標を「述べ外国人宿泊者数」とします。成果目標5は「文化芸術の魅力で“選択される”都市となっている」としまして、指標を「コンベンション等開催件数」とします。指標の3、4、5につきましては、新潟市まち・ひと・しごと創生総合戦略を昨年度策定しておりまして、ここで設定しております数値を引用してきているものでございます。

委員の皆様からは、成果目標の立て方などについてご意見をいただいた後、また事務局で目標数値の具体的な設定などの作業を行っていきたくと考えております。新ビジョンを今年度末までに策定してまいります。その策定後は、本委員会でも新ビジョンに基づく事業の成果検証を次年度以降行っていただくこととなりますが、主な取組みのほか、この成果目標に沿ったいくつかの事業についてご意見をいただきながら、ビジョンを推進していくというこ

とを想定しております。

続きまして、最後に資料6をご覧ください。これは前回ご意見をいただきました、市民アンケート調査の調査票です。ご意見を踏まえ、ホームページから回答できるようにいたしました。市内にお住まいの18歳以上の方から無作為に3,000名抽出しまして、この7月29日に調査票を発送して協力を依頼していきます。

(太下委員長)

ありがとうございました。先ほども話題に出ましたが、資料5でこのビジョンを推進していった結果としての成果目標、成果指標をご説明いただきました。何かご質問等ございますか。

(村山委員)

質問させてください。こちらのアンケートなのですが、無作為に3,000名を抽出しということなのですが、この場合、年齢やそういったもののばらけ方はどういう感じになるのでしょうか。

(事務局)

新潟市の人口構成に合った形での抽出になります。

(村山委員)

ありがとうございます。この質問をさせていただいたのは、普段、私は大学におりまして、少し趣旨とずれるかもしれないのですが、文化に関して、今の若い人たち、18歳から22歳くらいの人たちがどのように感じているかというのを大変興味を持っておりまして、大学としてもこれに関連したことができないのかなと思ひまして、質問させていただきました。何か連動してできるようなことがあればとは考えるのです。ありがとうございます。

(丹治委員)

話を元に戻すかもしれませんが、文化や芸術で成果というのはなかなか表しにくいと思うのです。結果的に行政側としては報告書というものが出来て、そこにこの指標並びに数値的なものが出来て、先ほどの話ではないのですが、効果が上がりましたということで閉じるような形にだけはなってもらいたくないと思います。

例えば、今、瀬戸内で行われている瀬戸内国際芸術祭は週末はすごい行列で、フェリーにも乗れない状態です。そういった視聴率が高い、あるいは人が来たからこの文化プログラムが成功したとは私は100パーセント言えないと思うし、あるいは、たった一人のおじいさん、おばあさんが楽しかったと一言言ってくれただけでもものすごい成果になると思うのです。そういったバロメーターを一つの表自体、あるいは、例えば、ここで3番目の新潟の良さを伝え、愛着を育む活動をした学校の割合、これもとても漠然としています。やはりこの指標自体が難しいと思うのです。こういったものを最終ゴールにはあまり、参考事例程度にさせていただきたいというのが1点と、やはり文化芸術はこういったものでは計れないところがあるので、その辺をご了

解いただきながら進めるべきだと思います。

(太下委員長)

実は私も賛成です。最近のはやりとして、いわゆるニュー・パブリック・マネジメントの観点から、目標は掲げないといけないのでしょうけれども、そうはいつでもなかなか難しいなというところがあるのです。特に、新潟市の場合はまだそれでも一つの自治体なので分かりやすいですけれども。たとえば、文化庁で実は、この議論のときに私も参加していたのですけれども、いわゆる第4次基本方針という方針を作る、その方針を作ったことによってこういう成果目標ですという構造になっているのですけれども、実際には両者は関係ないではないかということです。ビジョンがあって粛々とやったからといって、例えば、訪日外国人旅行者数が2,000万人から4,000万人になるわけでもなく、間接的にはきっと関連するでしょうけれども、これは全くビジョンと関係ないですよという議論をずっと文化庁としていたのです。ただ、昨今、こういうものを載せざるをえないということです。理屈を超えた理屈で載っているのですけれども。新潟市の場合、先ほど丹治委員がおっしゃったように参考指標という表現のほうが、多分、よりきちんと分かって掲載しているのだなという感じは伝わってくるような気がします。

資料5、6だけではなくて、先ほどの3、4も含めて、もう一回振り返って、ご意見をお願いいたします。

(角地委員)

今ほどの文化に関しては評価すること自体が難しいということについてなのですけれども、数字にしなければいけないことに関して、また、数字にできるものに関してはそのように統計を取っていくという方向が一つあると思うのですが、一方で、おじいさんがとても楽しかったとかというところはなかなか拾いづらいのです。それを拾うのは数字ではなくて、例えば、インタビューを無作為にとって掲載するとか、ライターの人を外から雇って、その人が一定の個人にたった評価をするという方向で、複合的に、数字だけではなくて、ほかの人に共感しづらいかもしれませんけれども、言葉とかも使っていったらいいのかなと思います。

(太下委員長)

企業メセナ協議会などがそういうものを使っています。なかなか企業メセナにある効果というのがダイレクトに数値的には語りづらい部分があるというので、このようなエピソードがたくさんありますと、丁寧に紹介したりしています。なかなか財務当局には通じないかもしれませんけれども。

今の角地委員の話聞いて思ったのは、丹治委員の話もあつたのですけれども、例えば、高齢者の方がこれから数としても割合としても増えていくのです。それで、日本は多分、世界最速、最大の高齢大国になるわけですけれども、ご案内のとおり、高齢と認知症はすごく密接な関連があつて、認知症予備軍が日本は世界最大になると思います。認知症になると家族のケアとか

医療費の支出なども含めて膨大な費用になってくるというので、この認知症のケアに文化的な活動を組み込めないかなと私は思っています。ケアというのは予防も含めてです。例えば、こんな数字があるととてもすてきだなと思うのは、高齢者の中で、文化活動をしていることによって自分は健康に長生きできていると思っている人の割合とか。その割合と実際の新潟市内の平均年齢とか健康寿命とがもしリンクして、確認できれば、私は厚生労働省から文化予算をもらってもいいのではないかなと思うのです。文化庁予算は年間1,000億円ですが、厚生労働省の予算は30兆円ですから。新潟市でモデルを作ってやっていけばいいかなと思います。

(伊藤委員)

障がい者の方々の芸術あるいは高齢者の方々の芸術は、例えば、アートフェスティカルなものを新潟で大々的に開催するというのは、一つ伸び代があるのではないかなと思います。新潟は非常に、弱者という言い方はあれですけども、そういうところに優しいという施策をとっているというところもありますし、そういうことで全国から作品を集める、例えば、80歳以上のおじいさん、おばあさん限定とか障がい者限定。障がい者のアートは、私はネットでしか見たことがないのですけれども、やはり、かなりレベルの高いものがあったり、逆に私たちにない才能を持っていたりということで、世界的にもかなり注目されているのではないかなと思うのです。世界からもアーティストを呼んで展示会をして、それを本当にバイヤーと称する人たちが来て買っていただくということがあれば、一つの職業として自立をしていくということの支援になると思うし、何か仕掛けを作って、せっかく新潟はそういうように取り組んでいるので、単に生きがいでだけではなくて、それをビジネスにもつなげられるような仕掛けを市から作っていくということもすてきなことだと思います。

(能登委員)

高齢者の総おどり体操というのを年間、延べで3,000人くらい踊っていて、生きがいになっているということらしいです。体を動かすこともそうですけれども、そういう文化的なコンテンツ、体を動かすスポーツもそうですが、やることによって知り合い、友達ができて、会話ができてということにつながっているというのです。

(今井委員)

今、健康というワードも出てきましたけれども、私も新潟市の健幸大使をやらせていただいて、本当に生きがいとかそういうものをPRしていきたいということで始まったのです。それと併せて、新潟市文化創造都市ビジョンという言葉自体が、市民にとっては何のためにそれを目指しているのだろうと。堅苦しくてぴんと来ないものを少し言い換えて、全国の中で住みやすい町ナンバーワンとは言えないけれども、ナンバーワンを目指していますみたいな。そのために、新潟にはこういう文化とかこういうものもあって、総合

して住んでいるだけで住み心地のいい、生きがいのある人生を送れる町なのですと、市自体が言い出してしまうみたいなものが進んでいくと、新潟市民も、そうだったんだ、そう思えばこういうものもあるよねという視点で見られるようになると同時に、市外の人にとってもとても分かりやすいまちづくりの形になるかなと思って、あえてキャッチーな表現をしてみるというのもありなのではないかと。ここに組み込めるものではないとは思いますがけれども、表現の中で形を変えるというのはありなのではないかと思えます。

(太下委員長)

今井委員、ありがとうございます。目指すべき姿みたいところで盛り込めるといいかもしれません。

(大谷委員)

ここにはまだすべて載っていないのだと思うのですがけれども、今、皆さんのお話をお聞きしている中において、やはり新潟は食と農業なのだろうと私はずっと思っているのです。先般、似たような会合の中で人口の流出とかそういういったものがやはり懸念されているのだろうと。新潟から外に出て行かれた方が、今の今井委員の話をお聞きしていて、やはり戻って来ていただける世代の方がいるのではないかと。ないしは、ここに移住を考えていただける方々がいるのではないかと。そういった部分も含めて、情報の発信ができればいいなど。一つには、高校生のダンスのフェスティバル等がありましたけれども、今後5年後、10年後等を踏まえて、やはりお若い方の世代、東京ガールズコレクションという話もありましたけれども、文化という部分では、最終的には継続性の問題があると思えます。小学生、中学生における、教育委員会等にバックアップしていただいた中でも、教育の部分から、お若い方々に文化の推進をしていただきたいと思います。最終的には、そういった教育の部分ですとか、あとは人材育成を含めた中で、現状、外に出て行った方々が戻ってこられるようなまちづくりないしはそれを発信できるようなビジョンがこういった部分に入ってくると、非常にいいのだろうと。今後は、どんどん人口が増えていけばいいなという部分が、こういう中に入ってくると非常にいいのかなと感じています。

(太下委員長)

ありがとうございます。大谷委員のご意見に関連して申し上げますと、資料5の指標の中で、先ほど丹治委員もおっしゃっていたのですが、3番目の、学校で何かやっている割合というものがありませんでしたが、それだけではなくて、Uターンについても、少し今のお話みたいな、新潟が魅力的な町だからUターンしてきましたと。そういう人の割合みたいなものが把握できるといいなと思えます。

さらに、高校については県の話題になってしまいますけれども、副読本でとても格好いいクリエイティブな新潟の魅力みたいなものを紹介する冊子を作って、本当は高校がいいと思えますけれども、新潟の魅力をきちんと伝え

ていくべきだと思います。多分、10年後とか20年後のUターン率が絶対に変わると思うのです。おそらく、高校で授業を受けたときはずっと頭から抜けていくのでしょうけれども、東京でつらい生活を送っていくと、ふとそのときのことがよみがえってくる。ではUターンして、新潟市役所に勤めてみようかと、そういう人が出てくるのではないのでしょうか。

(今井委員)

先ほどの続きというか、分かりやすく表現するという意味合いなのですが、手元にあるアンケート調査で、無作為にという感じなので、今回はこれでいいと思うのですけれども、今後、もう少し若い世代に向けてのアンケートのときに、この文言が、「ビジョンの見直しにあたりアンケートの協力をお願いします」という感じになっています。きちんと皆さんの暮らしをよくするためのものと掘り下げていけば分かるのですけれども、ぱっと見たときに、一方的なアンケートの願いと受け取ってしまうと、やはり面倒くさいなと正直思ってしまう人もいると思うのです。そういったときに、タイトルをもっといい町にするために、委員長ではないけれども、そういう意味合いで、だったら協力しようかな、だったら応援しようかなみたいなニュアンスのタイトルがあるだけで、若者のアンケートの回答率が多分変わってくると思うので、今後、そういった形のものも取り入れていただいて、結果が知りたいなというアイデアでした。よろしくお願いします。

(村山委員)

今の今井委員のお話を聞いていて、私も若者に囲まれながら毎日おりますので、思っていたのは、文化という言葉は割と若者にとっては敷居が高いものなのではないかと思っているのです。今井委員のお話でもありましたけれども、文言がというのが若者にとっては非常に重要なのかなと思っています。文化というところの年齢以上のものではないかと若者は思っているような気が、現場にいて感じております。文化というものをうまくかみ砕いたような軟らかい言葉で表現できないのかということと、体験の機会を教育現場でも何かしら持てないものかということも常々考えております。今でいえば本当に文言がというのは非常に私も痛切に感じているところでございます。

(太下委員長)

ありがとうございました。難しいですね。一応漫画とかの分野についても配慮されているのですが。一方で、お年寄りが見ると、市役所、お前らふざけているのかと言う方も出てくるような気もしますし、なかなかバランスが難しそうな気がします。

(能登委員)

何に役立てるかによってアンケートというのは取り方が変わってくると思うので、今の内容、お二人が述べられたことは、多分、それならばそれ用に作り替えればいいわけです。ということは、アンケートを何のために取っているかということを確認しておくことが一つであるのと同時に、本質的に

このアンケートを利用することを考えれば、市役所でアンケート調査を実施するのは違うのではないかと思います。例えば、サーチ会社とか本当のプロに頼まないと、アンケート調査で書かれていたものはアンケートに書いた人の答えであって、実質、新潟市民が全員そう思っているかというところではないのです。ということで考えると、アンケートの内容に執着しすぎてしまうと、先ほどの成果目標という、参考的なものなんですということにどんどんぶれていくというか、逆に振り回されてしまうのではないかと感じました。なので、この質問は市役所で書いているのですよねということです。

(迫委員)

関連するのですけれども、アンケートというより意識調査というか、若い人がどんな感覚なのかというのを、人が集まるような感じで、ボタンでマルバツを押すだけとか、5問答えると何かもらえるくらいの軽いものがけっこうあったりすると、若い人はこういう感覚なのとか、文化という言葉が分かりやすい、分かりにくいみたいなどころから始めてもいいと思いますけれども、何かそういうものがあつたらいいなと思っているのが一つです。

大きい話で、戻ってしまってあれなのですけれども、デザインの話をし忘れていたなと思っていて、デザインというのは非常に重要で、新潟市とか新潟で、今、グラフィックデザインの質がとても上がっていて、県外から第一線でやられている方とか、審査とかで非常に質が高かったり面白いと言っていると思います。何かその辺のものをもう少し入れ込むというか、どこの部分か分からないのですけれども、入っていくと、デザインという要素をどこかに盛り込んでもらえるとうれしかったり、デザイナーの方々が主体となるような。ミックスですね、デザインと何か。チラシを作るにしてもPRにしても、何かアートディレクション的な要素があるとそういうことが楽しかったり分かりやすいものになりやすいので、そういう要素が入つたらいいなと。どこに入れればいいのか分からないのですけれども、そういうことを思いました。

(太下委員長)

クリエイターという表現がどこかに出てきましたよね。

(事務局)

クリエイターは資料4、4ページの基本方針3の大項目の3。デザインについては1ページの基本方針1の大項目1の(2)にあります。

(迫委員)

情報デザインですね。文化芸術と一緒にではないけれども、アートとデザインが違ったり、その辺の、どれをやるのか分からないのですけれども、それは分かりやすくなってもいいかなという気はします。

(太下委員長)

今の迫委員のご意見をお伺いして、これがゆくゆくは何かの報告書になったときに、デザイナーが入ってやったほうがいいかなと思いました。

(迫委員)

もう少し分かりやすくなったり。字が多いとあれですけども。

(太下委員長)

表紙とか概要版の部分くらいはデザイナーのセンスで、美しくまとめたほうがいいでしょうね。

(迫委員)

そうですね。

もう一つ、ネーミングというか、言い方の表現はいろいろあるのですけれども、コピーというかネーミングにもう少し力を入れるというか、デザインと同じくらい、どういう名称で呼ぶかとか、そういう専門家がいたらいいのではないかとか、いたほうが分かりやすいのではないかと思うので、少し検討していただければと思います。

私もよく分かりませんですけども、糸井重里さんみたいな人が、非常にそうでもないこともそう聞こえてくるというか、どこにだれがいるか分かりませんですけども、非常に重要で、市の、水と土でもそれはそれでいいと思うのですけれども、水と土の芸術祭も、違う言い方をすればもっと楽しくとか分かりやすく聞こえたりすると思うので、それに力というか予算と、時間はかけられないかもしれないですけども、何か委員会を作ってやるとか。

(太下委員長)

今の迫委員のご意見を聞いて思ったのは、これはいずれパブリックコメントをかけるわけですよ。そのときに、当然、大項目とか中項目とか、表現自体についても何か言い換えがあればみたいなことも併せてお聞きすればいいと思うし、可能であればそれこそ大学とかでワールドカフェみたいなものを作って、もっとこれをクリエイティブな表現にできないかみたいなものもいいのではないかと思います。実際、ビジョンに採用するかどうかは別にして、そういう試みをやるともっと若い人たちに関心を持ってもらえるのではないかと、ふと思いました。

(オブザーバー)

資料4のところなのですけども、今回、名称に交流という文字が入っているのではないですか。ぱっと大項目や中項目を見ると、それほど交流というのは、4ページの最後のところに諸外国だとか他の都市ということで出てくるのですけれども、多分、本当のところは、その部分もあるのでしょうか。よそから多くの人に来て交流するという部分があるのかなと思うのです。多分、それはいろいろな取組みをやっているならばいいのだということなのでしょうけれども、あえて交流という言葉タイトルに入れるのであれば、もう少し、大項目までは行かないですけども、中項目とかその辺にそういう部分、ニュアンスを強調してもいいのかなと思います。

指標のことなのですけども、県でも施設の来館者数とかアンケートみたいなものを指標にしているのですけれども、どうしても施設の来館者数ば

かり見てしまうと本質を見誤ってしまうのかなと我々も思っていて、来館者数はふるわなかったけれども、来場者数のアンケートを取ると満足度はとても高いというものがあつたりして多分、周知の仕方が悪かったということになるのかもしれないですけども、その辺はいろいろ気をつけないといけないのだろーと思っっています。来館者数を増やすだけだったら、新潟県立近代美術館みたいにジブリみたいなものをしていけばそれなりに数は増やせるのでしょーけれども、それは新潟でなくてもどこでやっても中身は同じなわけですよ。その部分のバランスとかそういう部分は、私たちもそうなのですけども、考えていかなければいけないのかなと思っっています。指標の部分は、我々もそうなのですけども、いつも難しいなと思っっています。

(田中委員)

分からないのですけれども、参考資料を見ているのですけれども、基本方針2の4番目に違和感があるのです。「水と土の文化創造」と。いろいろなものを含む様式なのにそういうものだけが。何か違和感があるのですけれども、何かに入らないのですか。市民プロジェクト、こどもプロジェクトなどというのは、中に入るのか。ここだとそれに特化しているもので違和感があるのですけれども、考えすぎでしょうか。

(事務局)

参考資料に4番として独立してあるのは現行のビジョンのものでありまして、これからそれをどうしようかというのが、資料4の2ページ目の中ほどです。現状の案では、大項目の2番目に上がっているという状態だと思います。私自身も、先ほど太下委員長からも、同じような表現が分かれていたりとか、言葉を換えるべきだとかというご意見もありましたけれども、水と土というのは、新しく合併して政令指定都市になった新潟市の共通のアイデンティティーだということで、我々はどこから来てどこに行くのかという、新潟の文化を語るうえで大切な項目だと私は思っているのですけれども、これが独自の項目であるべきなのか、それとも新潟らしさというところでほかの項目の中の中項目くらいに当たるべきなのかは内部でももう少し議論する必要があるのかなとは感じていました。

(太下委員長)

実際には、こちらに組み変わっているということですね。

(田中委員)

組み変わったものを見せていただいても、やはり少し異質なものがあるなという感じは受けるのですけれども。

(太下委員長)

内部でもまだご議論されるということなので。

(大谷委員)

話が戻るのですが、冒頭、伊藤委員が先ほどお話をされて、空港の呼称、名称という部分がありましたが、非常に面白いなと思っいました。確かに国管

理の空港ではあるのですけれども、我々の業界団体としては、変えられるのかということ聞いてみようと思います。それ一つでももちろん何かが変わることではないのですが、今後、空港自体の活性化を含めた中で、いろいろなイベント、皆さんが取組んでいらっしゃるイベントを空港でやるということもありでしょうし、やはり、地元にある港湾空港の施設等の有効活用という部分は、今後、大きな課題として取組んでいかなければ問題なのかなというのは、我々の業界としても非常に痛感したところでございます。あれだけの施設のものをそのまま使わないというのはもったいない話です。ぜひ、ああいうところでいろいろなイベントごとをやっていただいて、市民の皆さんにご活用いただければ非常にいいのかなという部分を感じました。

それから、交流という部分において、先般、別の会合だったのですけれども、広域連携の話が最近をよくあります。広域連携をした際の、経済の方々是非常にいいことだというお話をされますけれども、地元の方からしますと、広域連携したら地元にお金が落ちないではないかというご意見もありまして、非常にそのバランスが難しいのだろうというのは、我々としても感じております。

先ほど、今井委員がおっしゃったインバウンドという部分は、今、どこに行っても聞きます。訪日外国人客という部分もありましたけれども、訪日外国人客は顕著に毎年増えています。いろいろな会合でもお話をしますが、現状、まだインフラの整備ができ上がっていません。それはやはり外国語の問題であったりということだそうです。先般、新潟の空港に今後ラオックスがいらっしゃるそうで、講演をお聞きしましたけれども、ラオックスの社長曰く、まだ中国の人口の1パーセントも来ていないと。日本は1億数千万、中国は13億人の人口を抱えていると。その方々が入れ替わり立ち替わり来るだけで経済は潤いますと。確かにそういう考え方もあるのだということを考えますと、やはり交流という部分は日本国内のみならず世界の方々とも交流をしないと、今後、経済が潤っていかないのだろうという部分で、非常に交流という文字を入れていただいたのはありがたいと思います。ただ、文字的に非常に固いなど。何かもう少し友好の部分が、イラストでもひらがなでもカタカナでも、もう少し軟らかい部分が入るといいのだろうなど。せっかくですから、市民の皆さんに、小学生の方でも分かるような文言ですと大人の方は分かりやすいのかなと。おじいさん、おばあさんにもご理解いただけるような、柔らかな、温かい文言だと非常にいいのかなと感じました。

(太下委員長)

ありがとうございました。文言などは練り上げていかないとだめでしょうね。

ほかに何かございますか。そのところは大体ご意見は出たでしょうか。

大体ご意見が出たようですので、進行を事務局にお返ししたいと思います。

3 その他

(司 会)

ありがとうございました。

「3 その他」ということで、委員の皆様から何か事務連絡等ございますか。

それでは、次回会議の開催につきましては、少し間が空きますが、今日いただいたご意見をまた揉み込みまして、今日、もう少し若い人のご意見を聞くべきだというお話もいただきましたので、そのようなことも少し考えながら、次回の会議につきましてはもう少し素案の形になったものを11月ごろに皆様にまたお示ししながら、もう少し柔らかい言葉になっているといいのですが、そのようなものを作りまして、開催したいと思っております。日程につきましては、また近づきましたら改めて調整等させていただきたいと思えます。

(事務局)

一ついいでしょうか。最後に、今日お配りしましたチラシなのですが、これはなぜお配りしたかという、裏面を見ていただきますと、「BeSeTo演劇祭新潟」と書いてあります。これが今回、今年のお、10月1日から15日まで、新潟のりゅーとぴあを会場に行う日中韓の国際演劇祭になります。これは新潟市が行う文化プログラムのキックオフイベントに位置づけているのですが、そのPRをさせていただきたいと思ひまして、お配りさせていただきました。

また、もう片面には少し赤っぽい「Noism0」ということで、これはBeSeTo国際演劇祭のプレ公演ということで、「Noism0」というのは昨年のお水と土の芸術祭でジャストワンナイトの素晴らしい公演を行っていただいたのですが、それをBeSeToのプレ公演ということで、さいたま芸術劇場で2日間にわたりまして公演しようという中身になっています。新潟の公演では「愛と精霊の家」ということで、同じ演目は見られませんが、ぜひ、関東方面にお住まいのお知り合いの方がいらっしゃいましたら、非常に評判の高い作品ですので、ぜひ、ご紹介させていただきたいと思ひまして、お配りさせていただきました。よろしくお願ひいたします。ありがとうございます。

(事務局・文化スポーツ部長)

最後に私から、本日のお礼を一言させていただければと思ひます。本当に活発なご議論ありがとうございました。内容が非常に固くて、私も字が細かくて、最初、困ったなという個人的な感想があったところなのですが、やはり、さすが委員の皆様、太下委員長の進行も含めまして、さすがですねという印象を受けております。本当に新潟市、皆様各分野で活躍されている皆様がいらっしゃる限りは、新潟市の文化も大丈夫だと思ひます。

やはり私が思うのは、文化というのは役所だけではできないところがある

と思います。ここが大事だよねということでお手伝いをしたり光を当てたり、いろいろ得意な分野があるのですけれども、それぞれここで活発なご意見を出していただいた皆様が、また自分の場所に戻っていただいて、ご活躍をいただければと思っております。一つは、これまでの新潟が持っているものの優位性、例えば、食であるとか芸妓であるとかマンガ・アニメであるとか水と土の芸術祭、これまでの取組みにどう磨きをかけていくかということのも大切です、一つは、これからのものということで、一つ経験した交流の部分で東アジア文化都市という優位性、それからアーツカウンシルネットワークという話も出ています。これもきちんとしていかないといけないと思いますし、また、角地委員のアール・ブリュット展について、ナント市との交流はまさしく新潟市の優位性だと思っております。

アール・ブリュット展に関しては、来年の10月18日にナント市でフランス、そして日本ということで、アール・ブリュット展の大きな催し物をやると。作品展示だけではなくて、いわゆる和太鼓であるとか神楽であるとかダンスといったもの。ロンドンのときの「アンリミテッド」に大分影響を受けているという話もあります。そのようなことをフランスのナント市が旗を振る形で、日本をパートナーにしてやってくださるという中で、角地委員が作品の発掘はなかなか、手を上げて出してくださいではなくて、一生懸命角地委員が施設で発掘して下さっているという話をお聞きしました。そういう部分で、新潟がそこでも大分発信できるものがあるのではないかというように期待します。また、次回、ぜひ、活発なご意見を賜ればと思っております。

(司 会)

以上をもちまして、第2回新潟市文化創造推進委員会を閉会いたします。本日は、お忙しいところをお集まりいただきまして、ありがとうございました。

4 閉 会